

震災直後の伝統的生業にみる潜在力

——福島県会津若松市における「青物小売り」を事例に——

佐 治 史*

1. はじめに—震災直後3ヶ月だからこそみえたこと

太平洋沿岸部を襲った巨大地震と津波によって多くの死者・行方不明者をだした東日本大震災からまる3年がたとうとしている。その月日の長さとは逆に、現実には被災地の復興は未だその途に就いたばかりである。福島第1原子力発電所事故による放射性物質の人体や環境への被害の把握や、解決に向けた具体的なとりくみはまったく進んでいない。全国各地の仮設住宅や公営住宅、親戚宅等で避難生活を送る避難者数は、27万7,609人（2013年11月14日現在）にのぼり¹、帰還の目途すら立たない状況である。

その一方で、この間、震災関連の研究は急速に進められてきた。とりわけ、復興時の行政やNPOの役割〔櫻井・伊藤 2013〕、文化財レスキューに関する研究〔荒木 2012〕には多くの蓄積がある。それらの研究のなかでは、復興の主体、まちづくりの主体として特に「コミュニティ」²という枠組みが好んで使われている。人類学者の木村は、行政文書や防災学で使用される「コミュニティ」という言葉が、以前から存在する何らかの集団や組織をさすのか、精神的な紐帯のことか、ある行政区内の住民のことなのか区別されずに使われていることに再考を促す。彼自身は、「集まり」という語を導入し、そこにかかわる人びとの多様性や差異をくみとりつつ、大船渡市の津波災害以後の復興プロセスを事例に、その問題点を析出し、文化人類学が今後いかに関与できるかの1つの可能性を論じている〔木村 2013〕。

筆者は、これらの震災研究に対して大きく2つの問題点を指摘したい。まず、調査される時間軸が震災以後に限られており、震災以前との連続性のなかで現状を理解する、将来を見据えるといった視点が欠けている点である。2つめは、「コミュニティ」を肯定的に捉えるにせよ、あるいは再考するにせよ、コミュニティを意識するあまり、それ以外の社会関係が震災下で果たしうる役割への視角が欠けていることである。それに対し、本稿では、コミュニティとは別の観点から、災害下の人びと

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻博士課程。

本稿の内容は、『大規模複合災害研究1』（2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、代表・関礼子）に掲載した「「野菜」をめぐるまなざしの交錯—震災直後の会津若松市における「青物小売り」を事例に—」を大幅に加筆・修正したものである。

¹ 復興庁が発表した、2013年11月14日時点の「全国の避難者等の数（所在都道府県別・所在施設別）」を参照。

² 木村は、論文中で自身が批判的に検討する「コミュニティ」として、人類学的な分析概念としてのコミュニティ〔田辺・松田編 2002、小田 2004など〕ではなく、防災の分野における理念的、標語的なものを念頭においている。筆者がここでもちいるコミュニティも木村のいう防災の分野における意味を踏襲している。

の紐帯について考えてみたい。事例とするのは、福島県の会津若松市近郊農家の、主に女性たちが伝統的に行ってきた、青物小売りと呼ばれる生業である。それは、一義的にはインフォーマルに行われる野菜の売買である。コミュニティのように何らかの集団としての形態をとっていないが、人びとに楽しみを与えたり、人びとを結びつけたり、ある種のセーフティネットのはたらきをしてきた。本稿では、それが震災直後に発揮した役割について考察することを目的とする³。具体的には、青物小売りの売り手と原発避難者⁴とのあいだに形成された新たなつながりと、従来からの得意先とのあいだで維持される社会関係である。

災害は、発生前の準備・警戒期、発生前後の緊急期、発生後の復旧・復興期というプロセスとして捉えられる。時間とともに、人びとの生活基盤や行政の機能もとのえられ、緊急期の混乱状態から、少しずつ生活を立て直していく。本稿であえて「震災直後3ヶ月」に注目するのは、政府や自治体も行政サービスを実施できず、仮設住宅を単位とした自治体の形成や、NPOが立ち上げる集いの場が形成されるはるか前に、伝統的な生業がある種のセーフティネットとしてのはたらきを果たしたことを書き留めておきたいからである。しかも、それは原発事故で農産物の安全性が疑問視される状況下でもやめられることはなかった。以下では、まず青物小売りの概要、原発事故後の野菜や青物小売りをめぐる変化を述べた後、新たなニーズへの対応と従来から継続される実践の2つを分析し、この生業がもつ潜在力について考察を深めたい。

2. 青物小売りとは

本稿の舞台、福島県会津若松市。かつて会津藩の城下町として栄えたこの地方都市には、周辺農村部から、自らが栽培した野菜をリヤカーや軽トラックなどに乗せ、町場の家々を巡り売り歩く女性たちが存在する。この生業は、通常「青物小売り」と呼ばれ、会津盆地の集落の中でも、特定の集落で行われ、イエを単位に主に姑から嫁へ引き継がれてきた。現在聞き取りで確認できる範囲では、自分の代で3~4代目に当たる人が最も多く、少なくとも明治末から大正期頃まで遡ることが可能である。

また、その活動は単に「伝統的生業」、「前近代的生業」という範疇で安易に片づけられないほど、今なおこの町の生活に深く浸透しており、大型スーパーマーケット、八百屋、あるいは産地直売所とはまた違ったかたちで、人びとの食生活において欠くことのできない存在として機能している。そのことは、筆者の2007年時点での調査において、旧市内およそ4キロメートル四方圏内に59組78名もの青物小売りが活動するという事実からも窺い知ることができる。

青物小売りといったとき、彼女たちに共通する一番の特徴は、自らが生産した野菜を自らの手で売り歩くことである。その日売る野菜は、前日の夕方あるいは当日早朝に収穫し、水洗い・計量・包装などの手間を経て、さらに価格が決められ「売りもの（商品）」となる。移動と野菜の運搬には、か

³ 本稿で扱うデータは、震災以前の2006年8月~2007年11月（悉皆調査は2007年10月に実施）に断続的に行った調査と、震災直後2011年6月5日~2011年7月21日に行った調査で集められたものである。青物小売りの売り手を対象にした栽培活動や販売活動の参与観察、聞き取り調査のほか、買い手、役場職員への聞き取り調査も実施した。また、口述資料だけでなく販売日誌、新聞、政策資料も参照した。

⁴ 本稿では、「原発避難者」を、「東日本大震災に伴う原子力発電所の事故による災害の影響により、その属する市町村の区域外に避難を余儀なくされた人びと」という意味で用いることとする。

つては徒歩でポテカゴという時代もあったというが、今は主にリヤカー、軽トラック（あるいはこれらの組み合わせ）、自転車であり、それは単に移動や輸送の手段というだけではなく、「動く陳列台」という性格も合わせもっている。そして、町場に赴けば、おおよそ決まった一定の範囲をテリトリーとし、常連の家々を訪ね売り歩くのである。こうした活動は、人によっても若干異なるが、平均的には週に何日、あるいは2~3日おきといったサイクルが決められ、年間では、「地のもの（地元生産野菜）」の収穫が始まる4月下旬から12月半ば頃までの、およそ8ヶ月間続けられるのである。

青物小売りが、「商売」として存立するためには、もう1つ重要な要件がある。それは、特定の野菜に高い生産量を求めるのではなく、必須なのは「畑に、常に販売できる何らかの野菜がある状態」を維持することである。けっして大量である必要はない。いうなれば小規模分散と持続的利用を特色とする野菜栽培の在来知が要求されるのである。なぜなら、青物小売りは、野菜がないからといって市場で仕入れたりはしない。あくまで、自らが生産した野菜を売ることが原則としている。そのためにも、「間畑を作らない」、つまり、わずかでも休耕地が生じることを避け、ある野菜の収穫が終われば、間隔を開けずに速やかに次の作物を植える、こうした作業を怠らないのである。しかも、作付ける野菜は、何種類かの異なる野菜、同じ種類の野菜でも異なる品種、同一品種の野菜でも播種時期を一定間隔ずらし収穫時期をかえるといった経験的な技能が駆使される。くり返しになるが、けっして大量生産をめざすわけではなく、むしろ、少量でも商品となり得るのであれば、そちらを選択し、野菜がない、品数が少ないという状況を極力回避するというのが戦略であり在来知なのである。その一方で、消費者ニーズに応じて、新たな作物や品種の導入や品揃えの確保、入れ替えなど、「商品としての野菜」に関するフットワークの軽さ、動きの柔軟さも、青物小売りの大きな特徴であり、これを経済活動として成立させる前提となるのである。

野菜を販売して得られる収入の多寡は、栽培規模、それに応じた顧客軒数や一軒当たりの購入量などによって異なる。ここで明示することは避けるが、売り上げは家計の重要な一部を占めている。

3. 揺らぐ野菜の評価と震災後の青物小売り

会津若松市を含む会津地方は、太平洋岸から遠く離れ、津波の被害は受けず、福島県浜通り地方や中通り地方と比べれば、地震の影響も小さかったと言われる。とはいえ、地震や原発事故の被害をまったく受けていないわけではない。本震は震度5強を記録し、死者1名、軽傷6名、住家被害も全壊4棟、一部破損330棟にのぼった〔会津若松市 2011〕。さらに見落とすことができないのは、原発事故による放射性物質の空気中への放出である。以前は、0.04~0.05マイクロシーベルト/時間（平成21年度）だった平常値が、2011年3月15日に、ピークの2.57マイクロシーベルト/時間を記録した。4月に入ると0.2前後、5月は0.17前後、6月は0.16前後で推移した。

原発事故を受け、原子力災害対策特別措置法に基づき、福島県全域において食品（農作物）の摂取及び出荷の自粛が要請されたのは、地震発生から約2週間後の3月23日のことである。会津若松市もその対象となった。4月中旬には、厚生労働省と県が実施した野菜のモニタリング調査で、会津若松市と下郷町、会津坂下町のハウレンソウから、会津管内で初めて基準値を超えるセシウム（基準値500ベクレル）が検出されている。県農林水産部が実施した「県内市町村の土壌における放射性物質

の測定結果（水田・転換畑）」や、それ以後実施されたモニタリング調査の結果、ほぼ一定の数値で小康状態にある空間放射線量の数値からも、会津地方に放射性物質が飛散し滞留しているのは明らかであった。

ただ、こうした現状が報告される一方で、筆者が調査した2011年6月、7月の時点では、「会津地方は、浜通り地方や中通り地方とは違い、大きな被害を免れた。被害はないに等しい」、そうした認識を多くの人びとが抱いていたことは間違いない。このような認識の背景には、いくつかの理由が考えられる。まず、県や各市町村単位で調査、公表される環境放射能測定結果の数値が、県内の他地域に比べ、相対的に低い値で推移してきたことである。くわえて、同市では、県内の他地域（県北、県中、県南地方等）に先立つ4月27日に、先述の農産物の摂取及び出荷の自粛が一部解除されたことも一因だろう。ちなみに、他地域では、1週間ほど遅れて5月4日から解除が進められた。また、5月4日以降もこれらの地域では、果実や穀類、工芸作物、山菜などの出荷や制限が要請されたのに対し、会津若松市の農作物は摂取や出荷制限の対象とはならなかったのである。

こうした一連のできごとは、会津産野菜の「風評被害」という言説やその認識の形成、広がりにも少なからず関係している。「風評被害」の真偽をここでは議論する余裕はないが、消費者による福島県産野菜の買い控え、価格の下落、あるいは買ったたきなどの状況に対して、県内、県外スーパーでの地元野菜の販売促進や、都内での会津産品のフェアの開催など、「風評被害」という言説を用いて、さまざまな対抗手段がとられた。

このように震災・原発事故直後の状況下、野菜の価値や評価が大きく揺らいでいるなかで、野菜をあつかう「青物小売り」は、いかなる布置に立たされているのか。以前と変わらず、彼女たちは活動しているのか、あるいは原発事故の影響で休業に追い込まれているのではないか。まず、そうした彼女たちの消息をたしかめることが、本稿にかかわる調査の第1の作業であった。その結果、以前からの59組78名の青物小売りのうち、亡くなった人、高齢や病気を理由にリタイアした人を除き、多くが活動を続けていることが確認できたのである。それだけではなく、野菜の価値が揺らぐなかで、新たなニーズに対応し買い手を増やしていることが明らかになった。以下、その状況を詳しくみていく。

4. 原発避難者からのニーズの登場

筆者は、震災後の調査期間中（6月5日から7月21日）、4名の青物小売りの販売活動に同行し、自宅を出発してから再び自宅に戻るまでの、販売ルートを選定、時間の配分、買い手とのやりとり、売り上げといった売り歩きの諸相を調査した。その結果、うち3名に関しては、震災以前の2007年の調査時点と、訪問先や訪問数、ルートを選定などに変化はみられなかった。しかし、売り手Oさんに関しては、震災後、以前からの得意先に加えて、原発事故で大熊町から会津若松市に集団移転してきた避難者を得意先にする、という大きな変化が確認された。ここでは、売り買いの場面、Oさんが青物小売りをはじめた経緯、Oさんの日頃の販売活動の概要を述べた後、大熊町からの避難者がOさんから野菜を買うに至った背景や経緯を述べる。

(1) Oさんの来訪を待ちわびる新たな買い手—ある日の販売場面から

青物小売りのひとり、Oさんの2011年6月28日の販売活動をみてみよう。午前10時、Oさんは自宅を出て、市内S町へと向かった。そして、到着したのはある教会であった。野菜の運搬手段であり、店舗も兼ねる軽ワゴン車を敷地内に止め、後部の扉を開けると、彼女は教会礼拝堂の裏手にある建物へと向かった。

Oさん：「こんにちは～、ヤオヤです」

玄関先で声をかけると、返事を待つでもなく、車へと戻った。なかからは、賑やかな子どもたちの声が響いてくる。そして、1分は経っただろうか。少しの間をおいて、ふたりの女性が姿を現し、車へと近づいてきた。

買い手Aさん：「どうも～、今日は雨降ってっから（Oさん）来れないかと思ってたの、ご苦労様です」

Oさん：「キュウリは大きくなるし、トマトは赤くなるしね、休んでるわけにいかないんだな～」

買い手Aさん：「そうはいかないんだな～。今日、T先生（現牧師の妻Tさんのこと）はちょっとおでかけになっていらっしやらないので」

買い手Dさん：「トマトがいっぱい、カボチャもある」

買い手Aさん：「カボチャ食べた～い、わ～、大根葉もある。こないだのズッキーニをね、昨日は、素揚げして（子どもたちに）食べさせて…そしたら『うまい』って言って。（略）スープにしてもおいしいし、ズッキーニのカレーうどんにしたらそれはそれでおいしいの」

Oさん：「煮ても焼いてもおいしい不思議な野菜だよね」

上記のようなやりとりの後も、会話は続く。品物を選ぶ過程では、「カボチャはいくらなのか？」「この野菜はどうやって食べたらいいか？」などとOさんに尋ねながら、彼女たちは1つ2つと気に入った品物を手にとっていく。買いたいものが決まると、「これをお願いします」と言って、お勘定の時間になる。Oさんは、「1、2、3、4つで400円になります」と、品物を1つ1つ指さしながら金額を数えていく。彼女たちは、その様子を脇で一緒にみながら、持ってきた財布から言われた金額を支払う。

お勘定が終わると、買い手Aさんの方から「金曜日も来る？」とOさんに確認し、「来ます。でも午後になっちゃうんだけど」と言うOさんに、「大丈夫です。また、よろしくお願いまーす」と言って野菜を入れたダンボールをふたりで抱えて、建物の中に戻っていった。

この日、彼女たちがOさんから購入した野菜は、Aさんがキュウリ、キャベツ、春菊の計3種類を400円、さらにキュウリ、ミニトマト2袋計2種類の300円分を購入した。聞けば、職場の同僚から頼まれた分だという。Dさんは、キャベツ、トマト（2個入り）、カボチャの計3種類450円分の購入であった。彼女も、職場の同僚に電話をかけ、Oさんの今日の品揃えを一通リ告げて、リクエストがあったキュウリ、ナス、シシトウ、ミニトマト計4種類400円分を代理で購入していた。このほかに、Aさんは「ここで使うのだ」という、カボチャ、ミニトマト、ズッキーニ、ネギ、トマト、キャ

ベツ、大根葉など合計2,000円分を購入した。それは、みかん箱いっぱいに溢れるほどの量だった。

(2) Oさんと青物小売り、得意先としての教会

Oさんは、現在51歳、3人姉妹の長女として生まれ、会津若松市K町の実家を継いでいる。K町一帯は近世よりすでに菜園場（サエンバ）と呼ばれ、若松近郊の野菜の生産地として市場や直売所、小売店等に野菜を供給してきた。また、同時に青物小売りを数多く輩出してきた地域でもある。若松中心部へも2キロメートル弱と近距離に位置し、アクセスも良い。

青物小売りを始めたのは12、3年ほど前である。イエが農地を所有し、代々農業を続けてきた。Oさん自身は、他の職業についての経験が長かったが、子どもの頃から農作業を手伝っており基本的な作業は身につけていた。栽培技術に関してわからない点があれば、母親や近所の農家の人たちに教を請うて手ほどきを受けたり、やり方を真似して修正していける環境があった。また、「青物小売りをする」という選択肢も身近に存在した。集落単位では、母親と同世代の人たちが今なお現役で青物小売りを続けており、馴染みのある商売形態であった。イエの単位でも、Oさんの父母の代は、市場出荷専門だったとはいえ、祖母の代には青物小売りに従事しており、自宅から若松市街までリヤカーを引いて得意先を売り歩いていたからである。Oさんも、小学生の頃、休日には祖母を手伝い、野菜を積んだりリヤカーの後ろを押し、若松の町の入り口まで送った経験がある。

具体的に、調査時点での彼女の売り歩きの様子を記述してみると、おおよそ次のようである。午前10時、自宅を出発し、約50世帯の得意先をほぼ決まった順序でまわる。途中で数軒、お茶やお菓子をご馳走になる得意先がある。Oさんが野菜を売り歩く範囲は、一番北は丘陵地帯に立つ団地、南は鶴ヶ城のお堀まで、市内広範囲に及ぶ。昼食をはさんで午後も売り、自宅に戻るの午後3時、4時頃である。Oさんが、この教会に野菜を売りに定期的に寄るようになったのは2、3年前からである。直接のきっかけは、演劇の活動であった。前牧師の奥さんもOさんも、演劇活動をおこなっており、普段は異なる劇団に所属しているが、客演で出演しあうなどの交流を通して親しくなった。打ち上げの際などに、Oさんは野菜の漬物を差し入れることがあり、そこから野菜を売り歩く話に及び、教会にも寄ってほしいと前牧師の奥さんから頼まれたのだという。教会のTさんによれば、野菜、魚、肉ともに品揃えが良く気に入って利用していた近所のスーパーがあったが、2年ほど前にちょうど閉店したことも重なったという。Oさんから定期的に購入するようになってからは、野菜は主にOさんから、Oさんが持ってこない野菜だけ、近所の別なスーパーで購入するよう使い分けている。

(3) 会津若松市への避難と大熊町託児室の設置

Oさんの新たな買い手となったのは、会津若松市に集団移転した大熊町の避難者であった。具体的には、S教会内に設置された、大熊町の臨時託児室で働く保育士の先生方が給食用、自宅用に青物小売りの野菜を購入するようになったのである。この託児室が設置されたのは、2011年6月初め、Oさんの野菜を購入し始めたのは6月第3週目のことである。

まずは、大熊町から会津若松市への避難の状況を確認する。2011年7月現在、大熊町住民約11,000人のうち、福島県内で避難生活を送っているのは、7,400人、そのうち会津若松市に2次避難

してきた人びとは、約3,000人である。彼らの多くは、2次避難所に指定された旅館やホテル、借上げ住宅、親戚・知人宅、貸家（家賃自己負担）、仮設住宅等で避難生活を送っていた。地震発生、津波、それらに端を発した原発事故により大熊町を離れ、2次避難先の会津若松市に移ってくるまで、以下のような避難経緯を辿っている。

3月11日、地震、原発事故発生を受けて、原子力災害対策特別措置法に基づき、福島原発3キロ内の地域に避難・避難指示、3～10キロの地域に屋内退避指示が出された。3月11日の時点では、町民は町内に設置された各避難所に身を寄せ、そこで一夜を過ごした。町単位での避難が実施されたのは、翌12日である。午前6時、町の防災無線で町民に避難指示が伝えられた。町民は、役場の職員とともに、用意されたバスに分乗し、まずは田村市都路町の古道体育館へと移動した。しかし、同日中に、先の法律に基づき福島第1原子力発電所の半径20キロ圏内、福島第2原子力発電所の半径10キロ圏内にも避難指示が出された。それを受け、田村市の都路町全域も避難指示の対象となったため、同日中に田村市船引町の船引小学校の体育館へと避難した。3月14日には、田村市船引町にある田村市総合体育館に大熊町の仮役場が設置され、田村市総合体育館に多くの住民が移動・避難した。他に、田村市船引町の株式会社デンソー東日本工場、田村市大越町の大越体育館なども避難所に指定された。3月22日、田村市の都路町の一部（20キロ圏内）が「警戒区域」の指定を受け、立ち入りが禁止され、さらに同日20～30キロ圏内が「緊急時避難準備区域」に指定されたため、大熊町の町民も更なる避難を迫られた。そこで、3月24日、全町規模での集団受け入れを会津若松市に依頼し、役場機能ごと会津若松市に移転することを決定した。

会津若松市への2次避難は、1次避難所単位でおこなわれ、約2,100人の町民の移動が4月3日、4日に大規模に、それ以降は漸次進められた。会津若松市役所追手町第2庁舎内に、大熊町会津若松出張所が開所されたのは4月5日のことである。その後、町民は、会津若松、東山温泉、喜多方、熱塩、大塩裏磐梯、裏磐梯方面に分かれ、県が借り上げた63ヵ所の旅館、ホテル等の2次避難所や、個人で借りた民間アパート等で新たな避難生活を送ることになった。また、仮設住宅の建設が進められると、5月17日から30日までの入居募集期間をへて、6月中旬頃から順次入居が開始された。

大熊町が、S町教会の別館で託児室をスタートさせたのは6月1日である。3月12日に避難生活を始めてから約3ヶ月を経てのことである。その間は、避難先の確保、移転、避難所での日々の生活に追われる毎日で、託児室を設置するという話が出る（出せる）状況ではなかった。転機が訪れたのは、町民の一時帰宅が検討されるようになってからである。一時帰宅は、現地での滞在時間に制限があり、かつ危険な状況下に置かれることが想定されるため、大人のみが若松を離れて作業にあたる場合が多い。その間、特に小さな子どもたちを預かる場所が必要になったのである。

託児室の設置場所として教会が選ばれたのには理由があった。それは教会が、その年まで乳幼児対象の保育園を運営していたためである。1967年に敷地内別棟でベビーホームを開設して以来、保育に携わってきた。しかし、近年の園児数の減少に伴い、2012年度からの休園を決め、会津若松市の保育課と休園の手続きを進めていたところだった（実際、2011年3月31日付で休園）。そのようななか、震災が発生し、大熊町の託児室として利用させてもらいたい、という会津若松市と大熊町からの申し入れがあり、建物や設備、遊具等を引き継いで、託児室の開設に至ったのである。

(4) 野菜を買い始めた経緯

保育士の先生方が、Oさんの野菜を買い始めたのは6月の第3週目頃のことである。教会の別館に託児室が開設された6月初めという時期は、大熊町住民の大部分が未だホテルや旅館での避難生活を余儀なくされていた時期である。ホテルや旅館では、食事は提供されるものの、自炊できる環境はととのっておらず、自分で献立を考えたり、託児室を利用する親が、子どもに弁当を作ってもたせることはできなかった。託児室での給食の提供は、「昼だけでもバランスの取れた食事を食べさせてあげたい」という保育士の先生たちの強い想いで始まった。

保育士の先生と、青物小売りとの初めての出会いは、6月の2週目頃であった。ただし、初めて出会った青物小売りはOさんではなかった。早朝6時半、いつもより早く託児室に着いた数名の先生が教会の近所で偶然みかけたのが、軽トラックの荷台に野菜を積み、辺りを売り歩く70歳くらいの年配の青物小売りだった。他の先生も、別な日に同じおばあさんを見かけ、試しに買って食べたところ、味が良かった。そのできごとをきっかけに、「会津の新鮮な野菜を子どもたちに食べさせてやりたい」、「農家の人から買いたい」と考えるようになった。そこで、保育士のAさんから、教会のTさんに、どうしたら定期的に農家の人から野菜を買うことができるのかを尋ねた。そのとき、教会にも毎週売りに来てくれる売り手がいるということで、Tさんから紹介されたのが、Oさんだった。

5. 避難者からみる青物小売り—ニーズへの合致

会津若松市という馴染みのなかった土地に移り住み、早朝の青物小売りの活動に気が付き、野菜を購入できるよう教会関係者に働きかけた大熊町の保育士の行動力には驚かされる。この行動の意味、つまり「なぜ避難者たちは青物小売りから野菜を買うようになったのか」を理解するために、3つの側面に注目したい。野菜に関する保育士の語り、避難所で食事、大熊町での食生活である。

(1) 鮮度・味の良さ

保育士の先生方が、野菜を購入し続ける理由として挙げたのは、まず鮮度と味の良さであった。スーパーマーケットで売られる野菜との比較から、次のように語った。「スーパーのトマトは、青いうちに収穫して買い手に届く頃に赤くなるようにしているけれど、Oさんのトマトは、木で赤くしてから持ってくるからいつも完熟している。新鮮だし、とりたてなのが良い。たぶん前日に収穫したものを翌日に持ってくるのではないか」(大熊町の保育士、50代男性、2011年7月5日)

(2) 避難所での食事

上記の理由のほかに、数ヶ月にわたる避難生活もOさんからの野菜の購入の背景にある。避難生活を振り返りながら、先生方が真っ先に語ったのは、体育館での住環境の悪さや衣類の不足、移動にともなう身体的なつらさ以上に、避難所での食事についてであった。最初の数週間は、賞味期限ぎりぎり、あるいは既に期限切れになった菓子パンばかりを毎日出され、しまいには喉も通らなくなったこと。お湯を沸かす設備がなく、温かいものが一切食べられなかったこと。そして、2次避難先の旅館やホテルで生活するようになってからも、自炊はかなわず、施設から提供される同じメニューのローテーションに飽きがきたことなど、食に関する話は尽きることがなかった。その避難生活の中で、何

が食べたかったかといえば、まず、何をおいても「野菜」であったという。支援物資のなかに野菜は無く、避難先の周辺農家の人や住民が、キュウリやイチゴを差し入れてくれた時、やっと口にすることができたという。しかし、そうした機会のごく稀であった。

工場に1次避難していた保育士Aさんは、避難所で食べた野菜といえば、自衛隊が来て、ようやく飲めるようになったみそ汁のなかに具として入っていたネギ、白菜くらいだった。1次避難先で、どうしても野菜が食べたくなったとき、1度だけ自家用車を持ってきていた他の先生にお願いして、キャベツを1個買ってきてもらったことがあった。しかし、洗う水も、煮炊きする場所もなく、葉をはがして、それを1枚ずつ市販の濡れティッシュで拭いて食べた。気持ちが悪いという人もいたが、それでも食べたいという仲間で分けあった。しかし、その当時は、スーパーや商店の品物も品薄で、かつガソリンも手に入れるのが難しくなっており、このように買出しに行ける機会は非常に限られていた。「ナスならナス、キュウリならキュウリをかたちのままに食べたかった」、「(野菜の)姿をみながら、姿を味わいたかった」という。Oさんの来訪を心待ちにしている理由の1つには、このように、震災直後のまだまったく先の見えない避難生活における、食をめぐる環境の悪さと、そのなかで生まれた野菜への欲求がみてとれるのである。

(3) 大熊町での食生活

しかし、単に避難所の食事で野菜が不足していたという理由だけではない。避難生活を強いられる以前の、彼女たちの日常生活も深く関係している。それは、彼女たちが、その量や種類は限られていたにしても、自宅の庭先に自らが食べる程度の野菜の栽培を行い、それぞれの季節の旬の野菜、鮮度の良さ、美味しさというものを知っていた、ということである。たとえば、保育士のAさんも、自宅の庭先に小さいながらも畑をもち、6、7月であれば、ちょうどキュウリ、ナス、インゲン、ピーマンなどが収穫でき、自宅で食べていたという。特に、Aさんの場合は、スーパーで野菜を買うといたら、玉ネギくらいであった。他の保育士の先生も、もちろんスーパーや直売所で野菜を買うことはあったが、親戚や隣近所で誰かしら野菜を作っている人がおり、季節になると大量に持ってきてくれたという。保育園でも、「祖母が作ったナスがたくさんできたから」、と保育士の先生が紙袋に詰めて持ってきたり、近所の農家から野菜の差し入れがあり、それを先生たちで分けあっていた。

保育士の先生たちが、Oさんから野菜を買う背景には、以前の生活のなかで野菜の鮮度の良さ、味の良さを感じ取るある種の「目」を獲得していたことが大きく関係しているといえよう。

(4) 不慣れな避難先での最初の会津との接点

野菜を買い続ける理由には、野菜そのものも魅力だけでなく、売り手Oさんとのコミュニケーションも含まれている。大熊町から100キロメートル離れた会津若松市は、気温や降雪量などにも大きな差があり、避難者にとって、物理的にも心理的にも「遠い」場所であった。避難当初は、市内のどこにどんな店があるのかも、まだ把握できていない状態だった。

そのなかで、青物小売りOさんが週に2回託児室を訪れ、先述のように会話を交わしながら野菜の売買を行うことは、避難直後に最初の会津の人との接点となったといえる。「馴染みの無かった野

菜と出会えて、Oさんとの会話の中で調理法も伝授してもらえる」と保育士たちは語る。2011年8月には、保育士と園児たちはOさんの招待を受けて畑と自宅を訪問し、野菜の収穫体験を実施するなど、野菜の売買を通じ、子どもたちも含めた新たな交流が生まれている。

6. 売り手や得意先の状況の変化

ここでは、震災前との連続性に目を向け、原発事故後、青物小売りの売り手自身や以前からの得意先取引をめぐるどのような変化が表れるようになったのかを確認する。

(1) 売り手が抱えるようになった問題

売り手にとって最初の打撃となったのは、2011年3月23日に出された食品（農作物）の摂取及び出荷自粛の要請だった。この時期は、例年、畑の雪が消える頃で、春先1番に収穫できる葉物類をもって、冬期間休んでいた販売を開始する。栽培についても年間の作付計画に従って少しずつ播種を始める時期であった。しかし、2011年は、この計画が立てられなかった。

「農協や市場から許可が下りなくて、3月半ばからしばらくは、野菜の収穫ができなかった。クキタチ⁵、ホウレンソウ、カブも全然収穫しないまま。クキタチなんて畑の中で花が咲いてしまった」（Iさん、47歳女性、販売暦6年、2011年6月16日）という。

続いて起こった問題は、販売しても買ってもらえないことだった。「毎年、クキタチがとれると1回の販売に20～30把売りにもって行って次々と売れた。震災後は、1回にもっていき量を5～6把に減らした。それでもなかなか買ってもらえなかった。買い手は、放射線のことを気にかけていた。70代、80代の年配の人は、『我々はこの先長くないからさすけね（大丈夫だ）』と言って買ってくれたが、孫がまだ小さい60代くらいの人の中には『本当に大丈夫か?』と何度も念をおした上で買う人もいた。買う方も、皆クダリ⁶ばかり買っていた」という（Iさん、82歳女性、販売暦47年、2011年6月21日）。

また、売り手自身も、見えない放射性物質への不安を口にするようになった。「自分たちはあと何年も生きられないから、『何食っても大丈夫だ』と近所の人と話している。ただ、震災後、天気予報の風向きを気にかけるようになった」（Eさん、80歳女性、販売暦54年、2011年6月8日）。Eさんは、畑に出ると「今日は東風だな、放射能も飛んでくるか?」とまず風向を確かめる。年齢の若い売り手Oさんは、「会津は福島県内の他地域に比べて、放射線量が低いから大丈夫だ。ただ、今後、買い手の中にも特に幼い子どもがいる家庭を中心に、自分の野菜を買わなくなる人が出てくるのではないかと話す（Oさん、51歳女性、販売暦13年、2011年6月28日）。

このように、野菜の安全が問われ、自らも不安を抱えながら、売り手はなぜ青物小売りを続けるのだろうか。そこに、青物小売りという生業がもつ経済的な側面と、それに留まらない価値がみえてくる。売り手は、野菜を売りにでかけることを「マチに出る」と表現する。それは、まずマチで稼ぐこ

⁵ 「クキタチ」は方名である。その種子は、「早生莖立ち」の名で販売され、会津若松市町北町荒久田が発祥の在来苔菜でありカブナ（*B. rapa*）に属する。

⁶ クダリとは、他県産かつ農協や卸売市場を経由して流通する農産物である。

とを意味する。青物小売りは、売りに行ったその日に現金収入を得ることができる。それは日々の食費、日用品の購入にあてられ、家計を支えてきた。また、売り手が世帯主であった時期は、その収入で「子どもを東京の大学に出した」、「蔵を建てた」という逸話があるほど、家計に占める割合が大きかった。それを考えれば、重要な収入源をすぐに絶つことはできない。次に、マチに行くことがもつ稼ぎ以外の側面に注目したい。「マチには、ムラとは違う人やモノ、情報に触れる機会がある」と売り手はいう。客の家でお茶を飲んで話をしたり、帰りに商店街で買い物をすることが「楽しみ」として捉えられている。さらに、マチに出ることは、買い手からの要請として語られる。「少しでも休むと電話が来る」、「マチの人は自分が来るのを待っている」という売り手の言葉には、売り手の自負や誇りとともに、マチに暮らす買い手がいてこそ成り立つ、青物小売りの社会的な側面が強く表れている。

(2) 買い手の葛藤

震災以前、得意先が野菜を買い続ける理由の上位にあげたのは、鮮度、味の良さ、安全性の3つの項目だった。しかし、震災後の買い手への聞き取り調査で聞かれたのは、鮮度や美味しさだけでは、会津産の野菜を買うことができなくなった、という語りである。

「何といっても美味しい、だから野菜売りの人からも買うけれども、放射線のことは心配している。買う量は少しずつ減らしている、売る人も心配しながら売っていると思う。自分たちが口にするものは、自分たちでその「安全性」を確かめる必要があると考えて、放射能物質検出器を購入することに決めた」（買い手 T さん、50代女性、2011年7月5日）。このように、高額の検出器を買い求めて口にする食品の計測を始める人も表れた。

また、そこまでしなくとも、「売り手は、『会津の野菜は大丈夫だ』と言うけれど、まだよくわからない。自分は、クダリの野菜で福島県から離れた遠くの野菜を買うようにしている」という対策を取り始めた人もいた（買い手 S さん、60代女性、2011年6月21日）。

買い手は、上述のような葛藤や野菜に対する不安を口にしながらも、購入を辞めることはない。それは、青物小売りが新鮮で美味しい野菜を売ることにくわえ、それ以上の役割を果たしてきたからではないだろうか。両者は、既に数十年に渡って野菜の取引を続けてきた。長い場合では、50年以上世代を超えてつきあいを続けている事例もある。売り買いの際に交わされる、天気や、日々の出来事、近所の噂話といった何気ない会話の話し相手から、家庭内の問題の相談や縁談の仲人役まで、売り手が果たしてきた役割は幅広い。また、買い手が商売をしている場合には、青物小売りがその店で買い物をするなど顧客関係を結んでいることもあり、両者の関係はさまざまな位相のものが複雑に絡み合っている。容易に関係が切れないのはそのためである。

7. おわりに

本稿では、震災研究の中で「コミュニティ」が分析の枠組みとして大きく取り上げられていることをふまえ、それを相対化することを視野に入れ、既存の伝統的生業が震災直後に発揮した役割について考察してきた。青物小売りは、震災以前から会津若松市街地（マチ）と近隣農村（ムラ）のあいだ

でおこなわれてきた野菜の売買であり、一義的には、売り手にとって家計を支える重要な収入源として、買い手にとっては美味しく鮮度の良い野菜を獲得する手段としての意味を持ち続けてきた。しかし、単なる商取引を超えて、何気ない会話や贈り物のやりとりも伴いながら、個人のレベルでも、またマチとムラのレベルでも、人やモノ、情報の日常的な交流を生み出してきた。売り手の来訪を待ちわびる買い手や、マチに野菜を売りに行く「楽しみ」を語る売り手の姿からも、いかにこの生業が地域社会に浸透し受け入れられてきたかが窺える。

このことは、放射性物質による土壌や農産物の汚染が疑問視されながら、青物小売りがなくならなかったことから明らかである。野菜自体の価値が揺らぎつつも、その他の小売形態に完全に置き換えられないこの一線にこそ、青物小売りを青物小売りたらしめる真髓が潜んでいるといえよう。さらに、野菜の売買を通して社会関係を形成するという特徴は、原発避難者として見知らぬ会津若松市に避難してきた人びとをもその輪にとりこみ、避難直後の慣れない土地での最初の会津との接点となったことも見逃せない。避難者の人びとが会津での生活に少しずつ馴染み、別なかたちで友人や知人が増えたり、土地勘を獲得した後であれば、青物小売りの野菜を購入する機会が生じることは考えにくい。まさに、あの時期だったからこそのできごとであろう。緊急事態に新たなニーズに瞬時に反応し、ある時期になればその役割が後景に退くところに、機をよみ、対応する伝統的な生業の潜在力をみることができるのである。

謝辞

本稿の主要部分は、宮城学院女子大学付属キリスト教文化研究所での公開研究会において行った報告に沿っているが、討論の際の議論をふまえ加筆・修正した。貴重な質問やコメントをくださった出席者の方々に、あらためて感謝申し上げたい。

参考文献

- ・会津若松市2011「東日本大震災とその後の会津若松市の状況について」会津若松市。
- ・荒木隆2012「福島県における文化財レスキュー事業の取り組みと資料館における今後の課題」『博物館研究』47(10) 日本博物館協会。
- ・小田亮2004「共同体という概念の脱/再構築：序にかえて」『文化人類学』69(2)、236-246。
- ・懸田弘訓2012「福島県の無形民俗文化財被災状況報告」『民俗芸能研究』52、3-18、民俗芸能学会。
- ・木村周平「津波災害復興における社会秩序の再編—ある高所移転を事例に—」『文化人類学』78(1)、57-80、日本文化人類学会。
- ・櫻井常夫・伊藤亜都子2013「震災復興をめぐるコミュニティ形成とその課題」『地域政策研究』15(3)、41-65、高崎経済大学地域政策学会。
- ・佐治史2007『「青物小売り」の民族誌—福島県会津若松市における事例研究—』東北大学文学部文化人類学科提出卒業論文。
- ・田辺繁治・松田素二(編)2002『日常実践のエスノグラフィ：語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社。
- ・野本寛一他1997『生業の民俗』(講座日本民俗学5) 雄山閣出版。
- ・松井健・野林厚志・名和克郎2012『生業と生産の社会的布置—グローバリゼーションの民族誌のために—』岩田書院。

参考ウェブページ・新聞

- 会津若松市 HP「県内産野菜の一部摂取及び出荷制限について」(<http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2007080300189/>、2012年3月1日)。
- 会津若松市 HP「東日本大震災とその後の会津若松市の状況について」(www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/_files/.../jyoho2.pdf、2013年10月11日)
- 田村市 HP「田村市災害対策本部・緊急時避難準備区域(4月22日)」(<http://www.city.tamura.lg.jp/saigai.jsp>、2011年8月11日)。
- 田村市 HP「田村市災害対策本部・避難指示(3月12日)」(<http://www.city.tamura.lg.jp/saigai.jsp>、2011年8月11日)。
- 鮎ふくしま自治研修センター HP「東日本大震災における避難所活動の記録(2012年2月)」(<http://www.f-jichiken.or.jp/tyousa-kenkyuu/241227hinanjokirokukaitei.pdf>、2013年3月1日)。
- 福島県 HP「環境放射能測定結果・検査結果関連情報」(http://www.pref.fukushima.jp/j/old_data.html、最終閲覧日2013年3月1日)。
- 毎日新聞 2012年08月22日 東京夕刊。

質疑応答

八木祐子（宮城学院女子大学国際文化学科）「今日は、多民族の研究会の1つとして、京都大学大学院生の佐治史さんの発表をお聞きします。佐治さんの専門は、文化人類学でタイの専門家なのですが、学部時代、東北大学の学生のときに、会津で青物売りの発表のベースになる研究をずっとやっていました。それで、この前、たまたま会ったときに、震災以降はどう変わったかという話を、聞いたものですから、今日発表してもらおうことになりました。じゃあ、自己紹介を兼ねてよろしく願います。」

佐治 「ただいまご紹介に預かりました、佐治史と申します。今日は「人びとをつなぎ直す震災下の伝統的生業—福島県会津若松市における震災直後の「青物小売り」を事例に—」、というタイトルで発表させていただきます。配布資料は2部になっておりまして、適宜パワーポイントの方も見ていただければと思います。先ほど八木先生からご紹介いただきましたが、今日の報告内容は、私自身、出身が福島県の会津若松市ということもありまして、東北大に提出した青物小売りに関する卒業論文（2007年当時に調査）の内容に加えて、震災直後にそれがどういう風に変化したのかということを見ていきたいと思います。青物小売りは、農家の方が「自分で生産した野菜を自ら売り歩く」という伝統的な生業で、それが震災後、とりわけ放射性物質の影響で野菜の価値が大きく揺らいだ時期にどういう状況におかれたかを、今日はお話させていただきたいと思います。今日の報告は、何とかこれから調査を重ねて論文にしていきたいという中間報告的な内容になっておりますので、みなさまからのコメント、疑問等どんどんいただければ幸いです。では、始めさせていただきます。よろしく願います。本報告の流れですが、ここにありますように、まず目的を述べさせていただいた後に、青物小売の状況を話して、震災後の状況、特に直後の状況を述べさせていただきたいと思います。それでは、レジュメに沿っていきます。震災から2年半経ちまして、被災地を対象とする研究も徐々に出ている状況です。それらの先行研究をみると、復興時の行政やNPOの役割ですとか、特に文化財レスキューに関する研究が積み重ねられています。また、民俗学や文化人類学になりますと、民俗文化財の被災状況の報告を東北地方の県別に調べたものや、人類学ですと、津波の災害以後の復興プロセスの問題点を析出し、人類学という学問が今後いかにそこに関与していけるか、ひとつの可能性を論じた研究があります。それらを見たときに、確かにその重要性というものはあるのですが、そこから見落とされたり、カバーしきれていない部分があるのでは、と思っています。特にこれまでの研究は、対象期間が震災時やそれ以後の状況を研究したものが大半を占めているということです。そこで、本研究で試みてみたいのが、震災以前との連続性をふまえて、震災がもたらした変化は何なのかをひとつの事例を取り上げて明らかにしてみようということです。その対象として今日見ていくのが、これまでも困難な状況の中、時代のニーズを捉え、対応して継続されてきた伝統的生業である青物小売りです。そこで本報告の問いは、震災直後、短期間に野菜をめぐる評価や価値が大きく揺らぐ中で、青物小売りはどのように変化したのか、あるいは何が変化せずに維持されたのか、に設定したいと思います。調査期間と方法を説明します。まず、調査期間は、私が学部時代、仙台に滞在していたうちの2006年8月～2007年11月と、震災直後の2011年6月5日～2011年7月21日です。調査方法

は、レジュメにありますように、参与観察、文献資料をもとにしています。特に売り手の販売日誌、栽培日誌等を用いています。

それではまず、震災前の状況を確認したいと思います。青物小売りとはどういうものかといいますと、まずパワーポイントの画面をご覧ください。左の写真の麦藁帽子を被っているのが農家の女性で、軽トラックの荷台部分にプラスチックのかごをたくさん載せて、それぞれのかごに野菜や花を入れています。軽トラックを運転するのは、旦那さんの役割です。そして、次の写真は向かって左側に立っているのが青物小売りの商人で、右側がお客さんです。こうやってお客さんの家の前まで行き、野菜を売る形態になります。もう少しいろいろバリエーションがあって、次のスライドの一番左の写真は、リヤカーを引いている姿を後ろから撮った写真、真ん中の写真ですと、手ぬぐいを姉さん被りして、腰に前掛けをしています。この前掛けにお釣りを入れています。自転車が移動・運搬手段で、自転車の荷台と前のかごに野菜を載せています。この方の場合、野菜の販売量は、自転車の前後に積める程度の少量です。一番右下の写真は、本来は田んぼの中で使う耕うん機ですが、自動車の免許は持っていないけれども、栽培量が多く、たくさん売りたいということで、この農機具に乗って公道を走って売りに行っています。レジュメに戻ります。調査地の会津若松市では、旧城下町4×4キロメートル四方に、青物小売りに従事する女性たち、その家族が59組78人存在することが私の調査でわかりました。その調査方法について少し述べますと、ゼンリンという会社が出している住宅地図を参照し、ゼンリンの地図のマスごとに私が町内を歩いて、その町内にどんな人がどこから売りに来るのかを町の人に聞いて、名前があがった集落や個人を全員訪ねて出した数がこの59組78人になっています。これを地図に落とし込んだのがみなさんにお配りした資料、町の立地なのですが、このように町ごとに区切って、各町内に何人の売り手が来るのかを色別で示しています。例えば、青色は、町内に1人から3人の売り手が来る場合、オレンジ色は、町内に10人から12人の売り手が来ることを示しています。レジュメに戻ります。民俗学の行商の研究では、こういった青物小売りのような移動を伴った販売活動は、前近代の遺習といわれ、もう既になくなったものと捉えられ、1980年代で研究が終わっていました。ですので、現在の状況がそれ以降明らかになされていなかったのですが、実は、会津若松市の事例からわかるように、マチとムラの生活に息づいた現在も必要とされる活動なのです。

青物小売りの生業としての特徴を以下、レジュメにまとめました。まず、市場や農協から仕入れて売っているものではなく、自ら栽培した野菜類を自ら販売しているということが1番の特徴です。他にどんなことが挙げられるかという、レジュメの1から4ですが、会津若松周辺部の農村の中でも、特定の集落で行われ、特に稲作等と組み合わせられています。イエを単位として継承され、女性の現金獲得の重要な機会になってきました。町の中をむやみやたらと歩き回っているわけではなく、得意先をもって買い手の需要に応じて農産物を確実に販売するという戦略を取ってきました。後に説明しますが、収益だけではなく、買い手と売り手の社会関係や他の売り手との競争、協調関係も重視しながら行われています。こういった生業は農業、農家経営、野菜流通をめぐる時代の変化の中で、柔軟な対応をとってきて、今だからこそ（2007年現在）必要とされる存在として、同時代的な意義をもって存在しているといえます。

以下では、59組78人の売り手の概要を示したいと思います。資料編の図2から図5と、パワーポ

イントをご参照ください。まず年齢ですが、70代と80代の売り手が合計で45名。販売人口の63%を占めるという状況でした。性別は、女性が55名と7割を占め、男性が23人で3割を占めます。販売において、女性が重要な役割を果たしてきたことがうかがえます。居住地域ですが、居住地域は会津若松市の市街地の北部、西部、南部に位置する5つの地域で、市街地からの距離が2キロメートルから10キロメートルになっています。先ほどみた自転車を販売手段としている売り手や、リヤカーを用いる売り手などは、居住地と販売エリアとの距離は約2キロメートルです。軽トラックの場合は、居住地からの距離は約10キロメートルです。居住地からの距離と移動手段は密接にかかわってきます。売り手の輩出地域の実情はより複雑で、集落単位でみると、さらに青物小売りを盛んに輩出している地域とそうでない地域とに分類できます。次に継承形態を確認します。パワーポイントと地図で示しましたが、2007年現在活動する売り手の約4割に当たる30名が、姑から継いで青物小売りを始めています。昭和何年代に引き継いだのかを確認すると、継承した年代によって継承形態が大きく異なることがわかりました。特に、昭和55年以前と以後に分けてみるとその変化が明確に表れます。昭和55年以前は、姑から嫁へ、というパターンが多いのですが、次第に母から息子へ、実母から実娘へ、妻の単独販売から夫と2人での販売という形が増えてきます。この背景にあるのが、嫁がいても、嫁が農業以外の仕事を持ち、青物小売りを引き継がなくなったことや、結婚しない息子が増え、嫁ではなく息子に引き継いでいることがあります。また、夫と共に販売を行なうようになったのは、年齢を重ね妻が1人でリヤカーを引いて販売することが困難になり、移動の部分を夫が手伝うようになったためです。

次に、販売の技術を確認します。まず、各売り手は得意先をもち、販売件数は平均30軒から40軒です。週に2日から3日販売して、販売時間は主に午前中の3時から5時間になっています。買い手の家族構成や生活パターン、野菜の好みを把握して、どの家をどの順番で周るかを決め、販売ルートを組み立てています。これは先ほどの図1で見ていただいたように、他の売り手が数多く存在する状況下で行われています。相対で販売している様子を先ほど写真で見させていただきました。その際、買い手から新たな品種の導入であったり、販売単位や新製品（漬物やその他の加工品）の販売の要望が出されたり、時に苦情が出されたりします。それらを積極的に聞き入れ、臨機応変に対応するのが特徴です。

レジュメの3枚目に移ります。図16またはパワーポイントをご参照ください。売り歩くことで形成される社会関係を取り上げます。旧市街の町ごとに数名ずつ、住民へのランダムサンプリングを行ない、合計147名の住民に青物小売り野菜の購入有無や評価に関する聞き取りをしました。その結果、147名のうち、141名が青物小売りの得意先になっていることがわかりました。くわえて、1人の売り手だけから購入しているのではなく、複数の売り手から購入していることがわかりました。1番多い人ですと、グラフに示したように5人以上（6人）から買っている人もいます。売り手は、20代で嫁に来て、子どもが乳離れをする30代前半から売り始めた人が多いです。一方、買い手も世代交代をしており、売り手と50年近い付き合いを続けている方もいます。30軒売り歩くうち、2〜3軒、得意先の家に上がって、30分くらいお茶を飲みながらいろいろな話をするという「お茶飲み」の慣行が行われています。売り手は買い手の話し相手になるだけでなく、一人暮らしの老人の見守りの役

割を担ったり、近所づきあいの活性化をもたらしたりします。買い手と売り手の間でこうやって付き合いを続けているうちに、友人関係に発展した例や、売り手が買い手に頼まれて嫁さがし、婿さがしの際の仲人役を務めることもあります。

これはどういう社会環境の中で行われているかということ、大きくマチとムラという空間的な差異とつながりの中で成立しています。売り手は青物小売りに行くことを「マチに行く」と表現します。この「マチに行く」という表現は、具体的にどのような状況をさしているのでしょうか。歴史的にムラとマチの関係を遡ってみると、以前から周辺農村は市街地の人びとにとって、野菜の供給地であり、菜園場（サエンバ）と呼ばれてきました。野菜栽培に必要な肥料（人糞など）の肥汲みが昭和30年代くらいまで行われていました。肥汲みでお世話になったマチの人の家に、今も野菜を売りに行っているという売り手もいます。また、ムラとマチのつながりは、冬場の季節労働にもみられます。冬季は、雪に閉ざされて農作業ができませんでした。そのため、農家は冬季の季節労働として、漆器関連業に就いたり、酒造業に従事するために市街地に通っていました。このマチという言葉は、農家の人にとって、居住地から大きく隔絶した場所にあるわけではないのですが、村内とは異なる人との出会いや、新たな情報に出会う機会が広がる場所として認識されています。

次に、販売活動を支える栽培技術をみてみましょう。青物小売りの1年の活動は、概ね5月上旬に始まり、12月中旬まで続けられます。雪が降るまでが販売の期間です。Aさん夫婦を事例に、いつ、どのような品目を販売していたのかを分析すると、週に2日で、7ヶ月間で65日販売していることがわかりました。7ヶ月に自家栽培の野菜40品目販売し、毎回の販売で常時10品目を取りそろえています。これを可能にするのが、多品種・多品目・少量栽培の販売技術です。例えば、ある品目を2ヶ月間売り続けたいと考えたときに、種を撒く時期を5日や10日ずらしながら、7回くらい撒き分けて、収穫期間を延ばしています。震災後の話に入る前に、もう1点、市場に流通する野菜と青物小売りの野菜の差異について確認しておきます。青物小売りの野菜を、得意先ではどのように評価しているのでしょうか。まず、買い手は野菜を大きく2つのカテゴリーに分けています。「地のもの」と「下りもの（クダリモノ）」です。後者は、他県産、かつ農協や公設市場を経由して流通する農産物、という意味で使われています。買い手が青物小売りに野菜を購入する理由として、「鮮度の良さ」、「おいしさ」、「安心」の3つがあげられました。「おいしさ」とは、言い換えれば、買い手が求める「おいしさ」のことです。例えば、カボチャは1つの蔓からいくつも収穫できますが、買い手の中には、一番根元近くになる「モトナリカボチャ」をどうしても食べたいという人がいます。その場合、その買い手には、優先的にモトナリカボチャを提供するよう買い手は努めています。また、トマトに関して、赤いトマトではなく、熟す前の青くて固いトマトが好きという買い手もいます。その人には、青いトマトだけを別途袋詰めにして売っています。次に「安心」についてです。安心とは、無農薬の栽培を心がけていたり、傷んでいた、味が悪かったといった、野菜購入後の苦情や問題に対応し、返金や交換が可能であることを指しています。売り手と買い手が同じ野菜を食べていることからくる、安心感も含まれます。青物小売りのお金に関する話を全くしていませんでしたが、年間の売り上げは決して小さい額ではなく、家計にとって重要な意味をもっています。

レジュメ4ページ目をご覧ください。「問われる安全性と継続される青物小売りのなかで、震災

後に青物小売りがどうなったのかを分析します。福島第一原子力発電所の事故があり、福島県産野菜の安全性を疑問視する声の高まりと、風評被害という言葉の2つが出てきました。当初、私としては、3月11日以降、地元の野菜をあつかう青物小売りは活動の休止や休業に追い込まれてしまったのでは、というような予想をもっていました。しかし、実際には、多くの売り手、まだ40人以上が活動を継続しているということがわかりました。それで、最初に出した、「野菜をめぐる状況が変わっていく中で震災前と何がいか変わったのか、変わらなかったのか」という問いが出てきました。まず、ひとつの変化として原発避難者からのニーズの登場があります。その前に、会津若松市の被災状況ですが、会津若松市は震度5強の揺れが観測されましたが、福島県の浜通りのように津波の被害があったわけではありません。また、原子力発電所がある大熊町と会津若松市との距離が約100キロメートルあることから、原発から「離れている」という認識をもって会津の人は過ごしていました。ですが、原発事故による放射性物質の影響が全くなかったわけではありません。レジュメにも書かせていただいたように、2011年3月15日に1番のピークを迎えて、それで、4月以降になると徐々に下がっていったという状況です。これを受けて、野菜の摂取及び出荷制限が出されたのが3月23日で、表1を参照してください。そうすると会津若松市でも、ハウレンソウなどが出荷停止になっていたことがわかります。

これをふまえて、次に原発避難者からのニーズの登場をみます。新たな買い手として登場したのが、会津若松市に避難してきた大熊町の住民の方です。具体的には、会津若松市内の教会に、2011年6月に大熊町の臨時託児室が設置され、託児室の保育士の先生方が、子供たちに出す給食の材料として、また自宅用として、青物小売りの野菜を購入するようになりました。パワーポイントのスライド16の写真は、左側が売り手Oさんと託児室の先生方の売買の場面で、右側の写真は自宅用として購入した野菜を私に見せてくれているところです。右下の写真は、給食として調理され、子どもたちに提供された食事です。ご飯と野菜という組み合わせになっています。あとでちょっと献立も提示したいと思います。またレジュメにもどります。

そもそも、教会という場に、なぜ大熊町の託児室が設置されたのかということ、この教会が、長年保育所経営を続けており、2011年3月にちょうど休園したという背景があります。会津若松市の行政担当者から、保育所としての機能を備えていた教会の保育所を、大熊町の託児室として利用させてもらえるよう打診があり、教会側がそれに協力したということです。そもそも教会の奥さんと売り手のOさんが知り合ったきっかけですが、その鍵になったのが演劇でした。この教会が演劇活動を熱心に行っている教会だったこと、一方のOさんも学生時代から別な劇団に所属し、客演などを通して教会の関係者と知り合ったという前提があります。大熊町からの集団の避難経緯は、レジュメにある通りなのですが、大熊町から移ってきた人は3,000人、3月11日に避難指示が出されて、翌12日に町単位でバスが用意されて、西の方角を目指して避難してきたそうです。この保育士の方々は、炊き出し作業にもかかわっていましたので、3月11日の夜から炊き出しに動員され、その日から一度も家に戻ることができないままに避難し、公民館や体育館での避難生活を余儀なくされました。3月24日に、会津若松市に役場機能ごと移転することが決まって、4月3日、4日、5日に会津若松市に移ってきました。私が調査させていただいた6月の中旬は、会津若松市のホテルや旅館での生活から、

アパートへ移ったり、仮設住宅が建設され、入居が進められた時期でした。

次に、保育士の先生方がなぜ野菜を購入するようになったのか、その理由を考えてみたいと思います。その背景にあるのが、避難所での食事と大熊町での野菜をめぐる食生活です。スライド17の左のグラフは避難所の食事データです。大熊町の人も、一部この避難所で生活していました。食事内容をみると、ほとんどがおにぎりや、パンなどの主食のみで、野菜のメニューは3月24日の1度限りです。保育士の人たちも、「菓子パンばかりで、みずみずしい野菜が食べたかった」、「野菜の姿を見ながら、姿を味わいたかった」、ということを私に話してくださいました。また、大熊町にいたときはどうだったのか話を聞いてみますと、大熊にいたときは保育園の先生方も自分の家に畑をもち、自家栽培野菜を育てていた、タマネギ以外は全部、自分で栽培していた人もいます。スライド17の右側の表は、保育所の昼食の献立です。意識的に野菜を摂るように工夫していることがわかります。レジュメ5ページ目に移ります。「避難者から見る青物小売り—ニーズの合致」という項目ですが、青物小売りの野菜に対し、「味の良さ」「鮮度の良さ」があげられました。くわえて、売り手Oさんとの出会いのもつ意味です。不慣れな避難先での生活を強いられてきた保育士の先生方にとって、会津の人と日常的に接点を持った最初の契機が、この野菜の購入だったといえます。売り買いする際の会話の中で、調理法を伝授してもらったり、託児室の話や畑の話から、新たな提案が生まれ、園児を連れて、Oさんの畑での野菜の収穫体験が実施されました。

さて、ここまで避難住民との関係を見てきましたが、震災後、売り手自身の自らの野菜への認識や、以前からの得意先との関係はどのように変化したのでしょうか。まず、売り手が抱えるようになった問題として、作付けの計画が立てられず、栽培したとしても収穫できない状況が、2011年の3月半ばに生まれていました。また、例年、この時期は、畑から雪が消えて、青物小売りを開始する時期です。1番最初にクキタチという野菜を持って売りに出かけるのですが、2011年は販売しても売れなかったそうです。また、売り手自身が見えない放射性物質への不安を口にするようになりました。今までは、畑に行っても、風の向きの話などは聞いたことがなかったのですが、「今日は東風だな、放射線が飛んでくるか？」と、東の方向にある原発のことを気にしている様子が見られました。それでは、レジュメの7ページに移ります。以前からの得意先の変化です。震災後、野菜の評価が揺らぐようになった後も買い続けていることがわかりました。ただし、以前との違いがみられることも確かです。例えば、「買い続けてはいるのだけれども、今は鮮度やおいしさだけでは、会津産の野菜を買うことはできなくなった」という語りがありました。また、「売り手は会津の野菜は大丈夫だ、まあ、100キロ離れているから大丈夫だというけれども、まだよくわからない」という言葉も聞かれるようになりました。不安を口にしながらも、なぜ買い続けているのだろうかを考えてみますと、まず、青物小売りには野菜を買う以上の意味があることです。スーパーのように、野菜を買って終わりではなく、売買の場面で交わされる会話、「お茶のみ」を通して家族の話、悩みや相談ごとを聴き合うという役割も果たしてきました。また、売り手と買い手という立場が固定的ではないこと、相互補完的、さまざまな位相にわたるため、両者の関係を簡単に断ち切れないという理由もあります。具体的にいうと、青物小売りの得意先には、商店や自営業主が多数含まれています。青物小売りは、野菜を売る際には「売り手」の立場ですが、その得意先で買い物をするのが多く、その際には、「買い

手」の立場になります。つまり、互いにとって重要な客であるのです。

次に、売り手が続ける理由ですが、まず、青物小売りが貴重な収入源であることがいえます。年金だけで生活費を賄うのは十分ではなく、子供たちにもできる限り頼らないようにしたいという思いがあります。また、「マチに行く」という言葉に象徴されるように、マチはムラとは異なる人との出会い、情報が得られる場所として認識されており、出かけていく「楽しみ」があります。その活動は、自分の動機だけでなく、「青物小売りを休むと、マチの人から心配の電話がかかってくる。だから行かなくちゃいけない」と売り手が語るように、マチの人に必要とされているという売り手の認識が、活動を続けていく原動力の一つになっているともいえます。

それでは、まとめに入ります。問いを確認すると、「原発事故後、福島県産野菜への評価が大きく揺らぐ中で、野菜をあつかう青物小売りという生業がいかに変化したのか/しなかったのか」でした。調査を始める段階では、青物小売りは活動の停止に追い込まれているのではないかと予測していたのですが、実際は原発避難者からの新たなニーズが登場していました。また、震災後、売り手は自分が栽培した野菜に対して、少なからず不安を覚えるようになったけれども、放射線への対処方法を見出せずにいることも明らかになりました。得意先の中には、安全性を疑問視する人が表れるようになりました。以上が、震災前との違いです。次に、維持された点としては、野菜の取引通じて形成される社会関係や、売り手を介してのネットワークの存在です。大熊町からの避難者にとっては、青物小売りとの出会いは初めてでした。避難してきた人にとって、会津若松市は親類縁者、友達のいない慣れない土地でした。そのなかで、野菜の売買を通して形成されつつある青物小売りとの関係は、最初の会津との接点となったといえます。震災後、被災者支援やボランティア活動について話がでますし、学問の分野でもコミュニティの再考が以前にも増して大きく取り上げられるようになりました。それに対し、青物小売りの事例から、野菜の売り買いという、一見「支援」とは別な形をとりながら、売買を通して、人々の日常生活に寄り添い、自発的な形で、つながりやネットワークを形成し、人びとの生活を支える伝統的な生業の姿を示すことができたと考えています。

最後に今後の課題ですが、地震発生から2年半以上が過ぎて、この間の青物小売りの変化を十分に調査できていません。そこで、今後これを2014年の1月くらいから、また継続して調査していきたい、していかなければいけない、そう思っております。報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。」

質疑応答

〈八木〉 有難うございました。タイの方の研究もありながら、会津の研究も、両方、頑張っていますね。今日は、学部時代の恩師、沼崎先生が東北大学から、わざわざ来ていただきました。佐治さんの今後の研究につながると思いますので、質問、コメント、どんどん言っていただければなと思います。

〈岩川亮〉(宮城学院女子大学付属キリスト教文化研究所客員研究員) じゃあ、あんまり中身に入らない、単純な質問なんですけれども、この地図、その辺の地図のですね、A町駅というのが会津若松ではないのですか。

〈佐治〉 すみません。そう、これが消えちゃって、これがですね、パワーポイントにあったんです

が、このパワーポイントのここで一応示した、これですね。これの4キロ、4キロというのがA町の先ほどの今おっしゃった駅で、範囲はこの4キロ、4キロの範囲が今回の対象です。

〈岩川〉これが旧市街。

〈佐治〉旧市街です。

〈岩川〉じゃあ、この地図なんですけれども、つまり南の縁辺りにお城があるということですか。

〈佐治〉はい。そうです。

〈岩川〉ああ、そうか。わかった。そうなのですね。右側のほうに飯盛山かなんかがあって、ちょうどその駅だとか、お城とか、大体旧市街ですよ。

〈佐治〉そうです。

〈岩川〉具体的にどんな感じかなというのがちょっと頭の中に浮かばなかったもので。その旧市街というものは、高いビルでもなく、割りところ、一戸建ての家がたくさん並んでいるというものだったということですね。それで、話が飛んじゃうんですけども、震災以後に避難されてきた方が住む、教会ですか。教会も旧市街の中ということ。」

〈佐治〉そうです。旧市街の中で、特に21番の、駅の路線でだと、ちょっとわからないのですけど、21という左下。そのくらいにあります。」

〈富永智津子〉(宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員) 地図が映し出されているついでに教えてください。調査対象地域の中にスーパーマーケットはあるのですか？あるとしたらどの辺に、いくつくらいあるんですか。

〈佐治〉スーパーマーケットは、ここが駅なんですけれど、大きいのだとこの辺と、あと、この辺と、あと小さいのがこの辺。4ヶ所、5ヶ所くらいですね。あと、この辺に八百屋というのも、このあたりに、1ヶ所、2ヶ所、旧市街に5ヶ所くらい。

〈富永〉それは、調査対象地域の一番端っこの人でも歩いて買い物にいけるくらいの距離なのでしょうか？

〈佐治〉歩いてはちょっといけなくて。

〈富永〉とすると、もっと近いところに、買い物行く場所あるということですか？

〈佐治〉そうです。この4キロ越えると、大型スーパー、大型のイオンじゃない、イオンモールのような。

〈富永〉調査対象地域の世帯の平均年齢はどのくらいですか？

〈佐治〉平均年齢ですか。

〈富永〉高いのか、低いのか？

〈佐治〉お客さんを見た感じでしか、ちょっといえませんが、大体、もう60から80くらい。マンションなんかはこの売り手の人は寄らないので、そこだともうちょっと若い人がいると思うんです。

〈富永〉調査対象地域の世帯数を教えていただけますか？

〈佐治〉ちょっとそこまでは把握できていないのですが。

〈富永〉高齢化している場所で、買い物に歩いていくにはなかなか不便という感じなのですか？

〈佐治〉そうとも、まあ、言い切れなくてですね。例えばこちら辺に1軒、2軒くらいあるので、歩

いていけない距離ではない。

〈富永〉 そうするとそこのお店で売っているキュウリと、売りに来るキュウリの値段はどうなっているのですか？

〈佐治〉 価格はもう同じくらいです。それはもう、わたしも同時期にスーパーと売り手の値段を比較したんですけど、キュウリなら1本30円。3本で100円。4本で100円とか。

〈富永〉 じゃあ、行商のおばさんたちが市場調査をして、大体似たような値段をつけているということね。

〈佐治〉 そうです。先生のおっしゃるとおりです。スーパーで帰り道に確認したりして。

〈富永〉 なるほど。少しでも安くするとかそういうことはないの。

〈佐治〉 少しでも安く。

〈八木〉 値段の点で、震災後だから、価格の変化が起きているんですか。売れなくなったとか、安くするとか。

〈佐治〉 それは今まで、1回値段を下げてしまうと、元に戻すのがやっぱり大変だと言っていて。そこは変えたりはしないです、はい。でも、おまけをつけるとか。

〈八木〉 この場所は、その集団移転の教会でしたか？そのあたりは、そこだけに入っている。ですか？

〈佐治〉 その教会はここであって、その託児室。

〈八木〉 他は。住んでいるのは。

〈佐治〉 他は、結構散らばっているんですけど。この辺にも仮設住宅があって。

〈八木〉 スーパーにも近い。

〈佐治〉 近いですね。この辺は。あとは山のほうにも。ここから出てないんですけども、6キロくらい先にも大きい仮設住宅。

〈八木〉 そこの人たちは行商人の方たちから買ったりはしているんですか。

〈佐治〉 この中でも、このOさんに、そんなにたくさんいるわけじゃないですけども、ここに震災後売りに行くようになった人が。

〈八木〉 新たな展開があるの？

〈佐治〉 でも、車を持っている人が50代で、トラックでまわれるっていう人です。

〈富永〉 おうちにいる女性にとっては、女性が売りにくるのは安心かもね。

〈佐治〉 確かにそれはありますね。男性で売っているっていう人も数人いたんですが、奥さんが亡くなって、やっぱりそういう人は、家の中に入ってお茶を飲むということは絶対しないです。

〈八木〉 今の話の関連ですが、男性が80年代以降に増加したというのはいつ頃ですか？もともと、この行商がどれくらい遡る歴史を持っているのかという自体がわからないんですけども。女性による女性の資本というの、男性はどんな必要性があってでてきたんでしょうか？必要になるっていうこととその影響はどうですか？

〈佐治〉 そうなんです。まず、どのくらい遡れるかということなんです。売り手で遡れたのは3代目という人がいて、3代目だと90年前くらいに。明治生まれの前のおばあさんがやっていたとい

う。それはまあ、生まれた歳の記憶か。

〈八木〉 それは違うね。

〈佐治〉 そうですね。すみません。なので、3代目くらいの人がある程度、30、40代くらいになったときに始めた。それで、男性はもともと参加してなかったのに、やっぱり先生がおっしゃったみたいに、男性は作るほうに専念、女性が売っている間に、作るほうに専念。畑以外にみなさん、田んぼのほうも持っているので、そっちの仕事を男性が見る。共生の仕方があるイメージでやっておりました。

〈市野澤潤平〉(宮城学院女子大学国際文化学科) 生産経路についておたずねします。生産兼販売ということなんですけれども、米は別として、青物については、生産したものを全部、売り子さんが売りに行くんでしょ。生産したうちで、この部分はきれいで高く売れるからスーパーに出すとか、あるいは最近多いのは、道の駅で産直なんかを置いていたりしますね。あるものは出荷し、あるものは小売りで、と振り分けていたりはしないのでしょうか。

〈佐治〉 ありがとうございます。それはやっぱりそういう人がいまして、ただ、それがどういう人なのかというと、50代くらいで農協にも、婦人部にも加入していて、家族、あの息子の代までやっていて、というような人だと産直、そしてJAでも出して、そこで商品の規格から少しずれたようなものを、別な日に野菜を青物小売りとして売っているという人がいるんですが、そういう人は本当に、78人の中で5人くらい。で、あとは、はい、そうですね。

〈市野澤〉 そういう風に売り先を工夫して、少しでも利益を出そうというスタンスでやっている人はかなり少なくて、今は、何といいますか、ある種の慣行として、小売り専門を代々続けてきている。そういう人が多いんだ。

〈佐治〉 あるいは、その、自分が若かった30、40の頃は市場に出荷していたんだけど、その頃よりこう、経営の規模が縮小して、世帯収入が少なくなって、青物小売りだけに専念したっていうパターンも結構ある。

〈富永〉 それぞれの行商人の世帯の収入に占める割合っていうのかな。それはどうなっているの。

〈佐治〉 世帯の収入？

〈富永〉 なかなか聞きにくいですよ。

〈佐治〉 はい。そうですね。

〈富永〉 ここまで追えていない。

〈佐治〉 追えていません。

〈八木〉 年金の収入はあるの？

〈佐治〉 年金の収入はあります。

〈沼崎一郎〉(東北大学文学部) 年金、国民年金だと5、6万しかもらえないよね。

〈佐治〉 そうですね、5、6万。国民年金。

〈富永〉 そうするとかなりの家計の支えになっている活動っていうことでいいんでしょうね。商売活動ってことでしょ。

〈佐治〉 震災直後、これは3ヶ月後の話でしたけれど、3ヶ月後に、えっと、ちょっとやめたっていったおばあさんがいて、その人にこの間、話を、先月ですね、聞いたらやっぱり、あの、お金が

ほしいから再開したっていう人がいました。

〈岩川〉 基本的に専業農家っていうのは、全体、仙台の周りのほうだとね、結構、兼業農家は、ここはぜんぜんないんですか。

〈佐治〉 いえ、兼業農家はやっぱり多いです。

〈八木〉 そうなると収入構造というのは、ぜんぜん違うんでしょうね。その辺がやっぱりわからないと、収入面での見え方が変わってくる。

〈佐治〉 そうですよ。

〈沼崎〉 一番大きな違いって何。震災の後で。

〈佐治〉 震災の後ですか。いや、なんか、そうですね。一番違うと思ったのは、新たな買い手がこう増えているということにあると思ったんですけど、でも、なんかよくよく考えると、今までと、おばさんたちは同じように、というか続けていて。むしろなんか、震災によって、それまで、売り手と買い手との社会関係があるというようなことを、まあ、なんか見ていたつもりだったんですけど、実はこの野菜の価値がこんなに揺らいでいるのに、これだけの人が続けているということは、実は、野菜を売ることも重要ですけど、それ以上に、今まで築いてきた関係や、野菜の売買を通して形成される社会関係がこの活動を支えていたんだなっていうことに、あの、震災前と震災後を外からみて、気がついたことで。なんか、そこが違いとか、逆に見えてきたことかなというのを思っています。

〈富永〉 例えば共同体のありかた、といったことですか？

〈沼崎〉 もともとは伝統的な町と村の関係なんですよ。町場に売りに来るんですから。

〈富永〉 そうか。共同体とは違うんだ。

〈沼崎〉 共同体とはまた違うでしょう。あの、半世紀まで遡るんだっけか。

〈佐治〉 遡ります。

〈沼崎〉 だから伝統的な町場と、町場の消費者と、農家のつながりのグローバルエコノミーがずっとあってね。

〈佐治〉 まだ事例の状態で、これをまだどういうふう論文にしていこうかなと悩んでいます。

〈沼崎〉 気にしないでやるならば、最近はその青物売りの継承が、母から息子へとなくなってというところで、息子とその奥さんが、別の仕事についている。それで、より青物売りというものの依存度が経済的に高まってきているけど、やるには足りないだとか、そこまではいえないよね。

〈佐治〉 そうですね、そこまでは、その世帯全体でってところではまだ見ていなかったの。

〈沼崎〉 じゃあ、個人というよりは、家族といいますか、世帯がどれだけ震災以来、支える役割を、最初は補助的なものだったけれども、結構、柱的なものになっていくということがいえないかな。

〈富永〉 週2日働いてね、1日3時間から5時間働いて、それなりの金額を稼ぐっていいねえ。

〈八木〉 その種の話だと、志摩の海女さんの調査を過去にしていたので、同じような感じなんです。年間の半分しか働かないから。かなり稼ぐ人は300、400万稼ぎます。60代以上の女性で、多いときは月20万、25万と稼ぐ。ただ、年金もあるのでお小遣いが全部、孫とかにわたるといううらやましい話です。志摩の海女さんと同じように、会津の行商も、週に2、3日とか週何時間だから、高齢で

も続けられるということだろうし。一方で、その息子たちは、震災後にいろんな話もありますけれども、他の仕事を持っていてもやれるのかなと思います、どうでしょうか。

〈沼崎〉 それは跡継ぎが息子や嫁じゃなくて、息子や娘になってきたって明らかに農家の家族の変化なんだよね。根本的にはね。だから震災なんかなくてもずっとおきている。

〈八木〉 世代的な。

〈沼崎〉 高齢化とそれから家族の形態の変化、家族内の人間関係の変化がずっと起きていて、その続きでってこともあるし。

〈佐治〉 そうなんですよ。震災っていうのよりは。

〈沼崎〉 大熊町では3,000人は大きいよね。だってね。

〈富永〉 ここで3,000人いるわけじゃないでしょう。

〈佐治〉 そうですね、はい。とりあえず。

〈富永〉 ここは何人くらいいるの。

〈佐治〉 ここはえっと、15人ぐらい。

〈沼崎〉 いや、会津市内で何人？

〈佐治〉 会津は3,000人。

〈沼崎〉 でしょう。

〈佐治〉 はい。

〈沼崎〉 だから会津だけでこの変化を大きいはずだから、それがどのようにこれに関わってくるかはわからないけれど。しかもちょっとやそっとでは終わらない避難だよ。これだってこれから当分続くでしょう。神戸の震災、一番長い人は7年とか8年でしょう。

〈八木〉 避難してきて買う人たちが、例えば同じ高齢者だったら、気にしないでいいんだけど、若い世代は気にする。もう1つは購入量が結構関係あると思うのね。最近はずっとずつしか買っていないとか。おばあさんたちは食べるけれど、孫たちには食べさせないとか、なんかそういうのがね。買うのは買うけれど、震災後、買う量が減ってないとか、やめた人もいるだろうし、そのあたりの関係性も変わってきていると思いますよ。

〈佐治〉 そこまでまだ。追いかけていないので、ちょっと次に行った時に気をつけてみたいと思います。

〈富永〉 きちんと家計簿のようなものつけているの？

〈佐治〉 帳簿ですか？

〈富永〉 ノートに。

〈佐治〉 はい。

〈富永〉 毎日いくら儲かっているのかとか、どのくらい売れたってということも？

〈佐治〉 何を何袋持って行って、いうのをいくらでっていうのと、何袋でって、それをなんか10年分ですとか、20年分ですとか。

〈富永〉 すごいね。アフリカじゃ考えられない。

〈八木〉 相澤さん、せっかくいらっしゃったので、なにか質問ありませんか？

〈相澤卓郎〉（東北学院大学学生） この資料の16番からが10から15人で、このふたつの地区ってなんでこんなに人が多いんですか？

〈佐治〉 まず、お答えすると、この地域っていうのは戦後、会津若松に引揚者なんかが入ってきて、人口が増えたときに新興の住宅がたくさん建ち始めた場所です。線路沿いにあるんですが、ここは昔、旧市街のはずれて言われている場所で、差別されるような職業の人が住んでいたりとか、今もまあ、そういうところもあります。だから新しく入ってくる人がたくさんいるような場所。今は、売り手と同じような年齢になったような人たちが住み続けているという状況です。ここは、ちょうど町の中に入ってくる通り道にあたる場所でもあり、なので、みんなが必ず通る、まあ、立ち寄ってから街の中に入っていく場所なので人数が多くなるんです。

〈相澤〉 このふたつの地区はスーパーが多いっていう話があって、気になったんですけど、少し余談になるかもしれないんですけど、これって少しうろろして、青物小売で野菜を販売するというよりは、直売所を作ってそこに来て買うほうが、若干効率がいいのではないのかと。

〈佐治〉 したっていうのが、あの、売り手にしてみれば。

〈相澤〉 ずっと続けてきたのは？

〈佐治〉 ああ、そうですね、えっとここに、まあ、確かにひとつだけ直売所があるんですが、5番のあたりに。なんでそこに動かないのかっていうと、この活動はその、経済、収入の、なんですかね、収入多いか、少ないかっていう経済性ってだけで行われている活動ではないってことが、まず、重要な点で、あとは、あの、市場で、直売所に出すって結構いま、増えているんです。皆さん、簡単にできるかなって思っているかもしれないんですが、実は直売所に出すにも1年間の栽培計画とか、種をどのぐらい撒いたとかの、分厚い書類を作成しなければいけなくて。いちいち細かく書ける人っていうのはなかなかいなくて。

〈相澤〉 じゃあ、直売所を経営している人っていうのは、その、青物小売している人とは限らないということですか。

〈佐治〉 あの、直売所の経営者っていうのは基本的にJAで、そこに出荷するっていう人は登録して、契約料とか払って、本当に出荷するだけなので、経営はまったく別になっています。

〈相澤〉 去年、自分も調査していたので、宮城県の丸森町を調査したのですが、そこではこれが一番売れるんです。僕が一番気になったのは丸森町内に9箇所くらい直売所があるんですね。あの、震災後の影響というのはレジュメの3ページにあるくたりものってあるんですけど、直売所の、まあ、丸森町でいうくたりものがよく売られているんです。丸森町の野菜も。こういうくたりものというものをどんどん増やしていかないと野菜が売れないとき、直売所がつぶれるようになってしまう。じゃあ、何が違うのかっていうとぜんぜん整理していないので、まあ直売所でやる、売るっていう方法と自営業化されている形の違っているところがあるのかな。

〈佐治〉 さっきのスーパーとかの話なんですけれど、スーパーとか直売所とかの比較から、入っていく部分を今回ちょっとぜんぜん設けていなかったの今回整理して。

〈富永〉 私が野菜を持って売ろうと思ったら、この売り方のほうがいいな。面倒くさくないでしょう。

〈佐治〉 わかりますね。

〈富永〉 品物も、ものすごく精選されて、出すのもね。だから、曲がったキュウリでも売れるしね。これだとね。

〈佐治〉 そういう良さもあるんですけど、それも、7ヶ月間、あの、週に2日ずつ、絶やさずで作るっていうのもやっぱり結構大変。売るのは、まあ、いけそうな感じはするんですけども。また作るってある程度の、売れるものを作るっていうのは。

〈富永〉 そういう場合はその、生産物は近所の人とは、なんか融通しあわないんですか、どうせ売る人はバラバラに離れ離れにいるわけじゃないですか。それで、商品を自分が作れない、作れなくて切れちゃったときは周りから調達ってことはできないの。そういうことはしないの。

〈佐治〉 それはですね、まあ、このひとつの手段って書いたんですけど、例えば青物小売りが盛んな集落では、集落の全20世帯がやっていたりするんですよ。

〈富永〉 全世帯？

〈佐治〉 全世帯です。ですので、自分の売り場がちょっとずつ違ったりとか、町で会ったり。だから、融通しあわないです。

〈市野澤〉 直売所に出ている野菜の良さというのは、値段が安いということもありますが、それ以上に一種のブランド性ですよ。生産者からの朝穫り直送という。そういう意味では青物小売には、ある種のブランド性というのは、直売所以上に付加しやすい。その辺のスーパーで売っている野菜でも、齋藤さんが作りました、とって生産者の写真を掲示したりしている。確実にこのおばちゃんを作ったという、作っている人の顔が見えるという意味では、本人が売りに来ているこれが、言ってみれば究極系ですね。野菜を売っていくうえでの、商品への価値付けっていうところでは、たぶんすごく有効なんですね。高齢者の方が多くて、スーパーに買い物に行くのはあまり楽ではない。だから売りに来てくれたらありがたいということは、もちろんある。それはまあ二面性じゃないでしょうか。便利さだけではなく、特別な高品質というか、スーパーの野菜とは違うおいしさというものへの期待。ブラインド・テストしたらわかんないかもしれない。小売りの野菜とスーパーの野菜と、区別をつけられないかもしれない。でも、おいしいと思っているの。

〈佐治〉 確かに。

〈相澤〉 確かにおいしいと思っているっていうのはある種の、ブランド信仰。そういうのは。スーパーの正社員ですし、でも、だからといってスーパーの商品を宣伝しようとそういうのはぜんぜんないんで。その直売所で、会津若松の青物小売にしる、野菜だって買えるし、肉だって買えるし、おいしい魚だって買えるし、日常生活品を全部そろえられるんだから、だったらスーパーで買ったほうがいいじゃないってなっちゃうと、わざわざスーパーで買うものはそういったもので、野菜はここで買うというのが丸森町を調査したときにすごくおもしろいなあと。

〈佐治〉 丸森の場合は、すみません、私が質問して。丸森の場合はどういうふうに分けているんですか、直売所とスーパーを。

〈相澤〉 丸森ってスーパー自体がすごく少なくて、一番は市役所に、町役場のほうに中心の通りにスーパーとか、スーパーがあるだけです。昔は、そういう商店があったのですが、今はもうどんどんなくなってしまって、その中で、直売所ってものができたんですけども、商店の代わりになるし、直

売所にいけばそういったものも売っているから買えるっていう意味もあるんですけども、やっぱり直売所で、わざわざ買うっていうのは、直売所がひとつの、なんていうんでしょう。交流の場所にもなる。お茶飲み場があって、じゃあ、お茶飲んでいけよと、漬物もあつたりとか、直売所内で。ある意味至れり尽くせり状態になったんですけども、直場所って野菜を買うっていうのは、野菜を買うだけじゃないですよ。直売所の人たちは、震災前は30万とか40万とか収入をあげていたのが、15万か11万以下に。年間3万、4万の収入に直売所は落ちて、その3万、4万をある直売所では14、5人で分けるそうするとお小遣いにもならない。年間の収入がそれしか得られないと。やっぱり買いに来てくれる人がいるからとそういうことを言っています。

〈沼崎〉 それは車で来るの、歩いてくるの？

〈相澤〉 車です。

〈沼崎〉 でしょう。田舎だったら車でみんな動いちゃうから直売所でいいんだよ。ここは適当に街場だから車で動かない人たちがある程度住んでいるところに運んでくるので成り立つの。

〈八木〉 スーパーの特売も宅配もどれだけ入っているのかなあ。

〈沼崎〉 宅配もだからさあ、注文の仕方がさあ、ネットで注文できるとかさ、そういうリテラシーが必要だからさ。

〈富永〉 そんなできるかな、60以上の人。

〈沼崎〉 そうじゃない、宅配サービスになると毎日同じものばかり、来てもういやだ、とかね。

〈八木〉 宅配は、注文をそのときしなければならぬ。しかも5,000円以上しなければならぬとかいうパターンか、定期的に決まったものだけがくるとか、どっちかだけだから、来たものの中から好きなもの適当に選べるって、行商はすごく便利だと思う。

〈富永〉 そうですね。

〈八木〉 おまけに、ニーズに応じていろんなものをそれぞれにして、今度こういうのがほしいから持ってきてってという、持ってきてくれるというこまめなサービスもあるしね。

〈富永〉 おまけに、家にいるかいなか問題にならないでしょう。宅配だったら、結果的に家にいないとね。行商は誰もいなくてもね。またすぐこれるし、置いてても気軽にいいですよ。

〈佐治〉 そうですね。玄関においてお金は次に。

〈富永〉 被災者でもあるわけだから、被災地でも仮設住宅街で移動販売車なんかで行くのともしんなに大きな違いはないのかなって。

〈八木〉 では、そろそろ時間も来ましたので、お話があれば懇親会で続けたいと思います。最近の震災をめぐる人類学の発表だと、仮設住宅を歩いているんな話を聞いてみるというのが多いから、こういうふうに、震災前からきちんと調査していたなかで、震災後どう変化したかというのは大事な研究だと思いますので、ぜひ、頑張ってくださいと思います。今日は有り難うございました。

〈佐治〉 有り難うございました。